

週刊センターニュース No.149



第149号(2007年3月12日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第143回共同学習会のご案内

日時: 3月23日(金)14時30分~16時(曜日時限が通常と異なっておりますので、ご注意ください)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階会議室

報告者: 堀内和雄氏(学生部長)

テーマ 「これからの学生支援について」

内容: 本年3月末に定年退職される堀内氏から、神戸大学や徳島大学の学務部長などのご経験を踏まえた、学生部を中心とした学生支援のあり方についてご提言いただく。その後、参加者間で本学の学生支援力をどうすれば高めることができるかについて意見交換を行う。なお、この共同学習会は、堀内氏を研究協力者の一人とする、研究課題名「大学評価指標における学生支援の位置づけに関する実証的研究」(科学研究費補助金基盤(c)課題番号18611004、研究代表:青野 透)の研究の一部をなすものである。

平成16年度「学習環境改善のための1年生アンケート」結果分析に基づく提言 - その1 「オープンキャンパスの充実」

教育企画会議学生生活部会が昨年11月に行った標記アンケート結果に基づき、学生からの改善提案が多かった、図書館と金沢大学生協に対しては個別に改善提案を行いました。既にそれぞれからご回答をいただき、改善策が実施に移されています。その内容につきましては、アカンサスポータルにて公開しておりますのでご確認ください。

さて、本誌上で教育企画会議学生生活部会の一員として、アンケート結果分析と他の資料から、全学教職員に対して、学習環境の改善に向けた提言を試みることにします。今回は、本学志望動機におけるオープンキャンパスの位置づけをめぐる提言です。

アンケート設問1「あなたが金沢大学を選んだ理由は何でしたか(あてはまるものすべて)」に対して、525人からの回答(合計1,503)がありました。回答上位は、「国立で学費が安いから 341」「学びたい学部・学科等があったから 316」「自己の学力を考慮して 285」という順となっており、これまでの全学生(院生を含む)を対象とした学生生活実態調査アンケート結果等と大きな違いはありません。注目されるのは、「『オープンキャンパス』、『大学見学会』で大学の雰囲気や、在学生、教職員の印象がよかったから 48」「高校で受けた金沢大学の教員による授業がよかったから 5」との回答です。すなわち、アンケートに協力してくれた1年生の約1割が、オープンキャンパスや出張講義が進学動機となったと答えているのです。

アンケート設問2では、「あなたは出願する前に金沢大学に関する情報を、何から得ましたか。(あてはまるものすべて)」と問いました(回答合計1,321)。「金沢大学ホームページ 327」「金沢大学発行の冊子「大学案内」、「学部案内」 322」「高校や予備校の先生 127」「受験雑誌 112」に次いで、「高校3年生の時参加した金沢大学主催の「オープンキャンパス」、「学部説明会」など 69」「高校での大学教員による授業及び大学案内 56」「高校2年生の時参加した金沢大学主催の「オープンキャンパス」、「学部説明会」など 50」「高校単位での大学見学会 33」という回答になっており、オープンキャンパスは受験の情報源として無視できないものとなっています。

一般的にも、オープンキャンパスが“大学案内やホームページには載っていない様々な生の情報が入手できる”“直接大学を確かめられる貴重な体験の場”として、受験生や進路指導担当高校教員に重要視されていることは言うまでもない事実です。ただし、『大学新聞』第37号(2006年2月25日)に掲載された、大学524校、高校471校から回答を得たアンケート調査結果では、オープンキャンパス参加目的を「ミスマッチ防止のため」とする回答が、高校では70.9%であるのに対し、大学では48.3%でしかなかったことが問題として指摘されています。

たった1日・2日のオープンキャンパスに参加したくらいでは、入学後のミスマッチを防ぐことはできないという見方もなりたちます。しかし、高校側では、他の様々な情報と併せて活用すれば、オープンキャンパスで得た情報が、生徒にとって望ましい大学・学部選択につながるという判断をしているようです。全入時代にあって、「入れる大学はある。でも本当に入りたい大学・学部かどうか」という悩みが深まり、選択肢が広がったなかでのミスマッチの深刻化を懸念する声もあり、オープンキャンパスの意義はより重要なものとなる傾向にあります。

さて、やはり上掲紙第41号(2006年10月25日)は、3,745名の高校生から得た「オープンキャンパスについてのアンケート」結果について、「高校生に対応した担当者の重要性が明らかになった。高校生たちは、体験授業を担当した教授、相談コーナーでの応対者、さらには学生の様子まで、敏感に察知している。高校生たちにとって、そこでの体験が志望校にするかどうかを左右する」と報じています。すなわち、「学生・教授・職員の態度・説明など」という項目が、<その大学に進学したいと感じたとき>の24.9%、また<進学したくないと感じたとき>でも24.5%であり、いずれも最上位となっているのです。「志望校として決定するかどうか、候補から外すか、共通点は、大学案内やホームページなどでは表現しがたいものが上位に来ている」と分析されています。

こうした実情を考慮すれば、オープンキャンパスの模擬授業を(持ち回りなどではなく)それぞれの学部でのいわばスター的教員が担当する、窓口の職員には高校生に不快感を与えない対応を意識させる、等の方針をもってオープンキャンパスの企画・運営にあたる必要があると思われます(拙稿「青野透(単著)「連載実務能力を養う大学経営人材論 第21回 実務としての学生支援サービスの充実 その4 窓口での優しい対応から始める」『文部科学教育通信』163号、2007年1月、18-19頁参照)。

学習環境を整備するためには、そもそも本学の教育理念に基づく教育を受けることを期待する生徒に受験してもらうことが必要となります。明確な目的意識をもった学生が一人でも多く入学してくるよう、高校生を中心とした学外者に対して正確な情報を発信する・・・オープンキャンパスはそのためのまたとない機会です。受験時までキャンパスを知ることなく、入学時点ですでに「こんな大学・学部とは思わなかった」と感じる学生に対しては、その後、大学が学習動機づけに努め、環境を改善しても成果は上がり難いでしょう。

本学は『大学憲章』において、「各種教育機関との接続，社会人のリカレント教育，海外からの留学，生涯学習等に配慮して，多様な資質と能力を持った意欲的な学生を受け入れ，学部とそれに接続する大学院において，明確な目標をもった実質的な教育を実施する。」と明記しています。これを具体化するためには、まずはオープンキャンパスを今以上に重要なものと認識してこれを改善し、大学・学部の実際の姿を受験生に正確に伝えることによって意欲ある学生に入学してもらい、入学後のミスマッチの未然防止に可能な限り努める、これが、本学が行うべき入学前環境整備と言えるのではないのでしょうか。

提言

オープンキャンパスの充実(スター的教員による模擬授業等)により、本学の教育理念・学習環境等について具体的知識を持った学生の受け入れに努力すべきである。

(文責：教育支援システム研究部門 青野 透)